

おそろしいほどの吐き気に襲われながらコートは顔を上げる。
心配そうに見つめるシロに、どんな言葉を言えばいいのかが分からなかった。

「どうして一くれなかった？」
再度、声がする。



「そうだ、そうだよ……」

「どうして一くれなかった？」



「どうしてだよ……」

握ったこぶしを壁に叩きつけ、コートは呻く。
それは、フードの残した言葉ではなかった。
どうして救ってくれなかった。どうして助けてくれなかった。
彼女がそんなことを言えない子だということは、コートが一番知っていた。
心の中にふつふつと湧き上がる怒りをぶちまけるように、コートは叫んだ。



「どうして一緒に死んでくれって言ってくれなかった！」



「思い出した……あいつは何も言い返せないようなヤツだったんだ」



「責められても！怒られても！笑って誤魔化して！」



「あいつは怒らねえ優しい子なんかじゃねえ！」

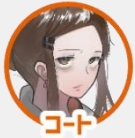


「怒り方を知らないから、自分のせいにするしかねえんだよ！」

コートの叫び声は白い部屋の壁を押し広げるかのように部屋に響き渡った。
こんな部屋、碎けてしまえ。



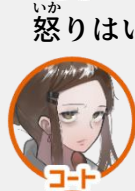
「習い事だってそうだろう！なんて私とフードを比べたんだよ！」



「親^{おや}同^{どう}士^しの喧^{けん}嘩^かだかなんだか事^じ情^{じょう}は知^しらねえが、
お前^{まえ}らの満^みたされなかつた欲^{よく}望^{ぼう}をフ^ふードで、私^{わたし}の親^{しん}友^{ゆう}で埋^うめるんじゃねえよ！」



「お前^{まえ}らが必^{ひっ}死^しに奪^{うば}っていくから、あいつにはもう何^{なに}も残^{のこ}ってねえじゃねえかよ……」



怒^{いか}りはいつしか涙^{なみだ}になり、頬^ほを滑^{すべ}っていく。



「あいつが、あいつが何^{なに}をしたっていうんだよ……」



「あいつを理^り解^{かい}してほしいんじゃない、何^{なに}も奪^{うば}わないでいてほしいだけなんだよ……」

叩^{たた}きつけた拳^{こぶし}の痛^{いた}みがじんと、遅^{おく}れてコートにやってくる。
シロは目^め線^{せん}を逸^そらしながら、ゆっくりとコートに語^{かた}りかける。



「……騙^{だま}していてごめんね。
そうだよ、フ^{じざつ}ードは自殺^{じせつ}した。これが事^じ件^{けん}の真^{しん}相^{そう}なんだ」



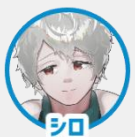
「キミは事^じ件^{けん}から塞^{ふさ}ぎこんでしまい、この世^せ界^{かい}に閉^とじこもるようになってしまったんだ」



「だけどボクは、キミには前^{まえ}を向^むいてほしかった」



「辛^{つら}いし、苦^{くる}しいけれど、キミには希^き望^{ぼう}を捨^すてないでほしかったんだ」



「だからキミが事^じ件^{けん}を忘^{わす}れたことを逆^{さか}手^てに取り、自^じ殺^{さつ}を殺^{さつ}人^{じん}にすり替^かえ、
犯^{はん}人^{にん}としてキミに復^{ふく}讐^{しゅう}の引^ひき金^{かね}を引^ひかせてここから出^でてほしかったんだ」

……自^じ分^{ぶん}勝^{かつ}手^てな動^{どう}機^きだろう？
そう言^いうとシロは扉^{とびら}の前^{まえ}に座^{すわ}った。



「そして、まだボクの勝^{かつ}手^ては終^おわってないんだ」



「ここから出るための条件をもう一回復習しようか」



「ひとつ、事件の真相を究明すること
ふたつ、引き金を何かに向けて引くこと」

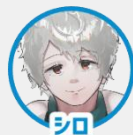
ゆっくりと、シロは微笑んだ。



「ボクを撃って、止まった過去の世界からキミは現実へと進むんだ」



「キミと過ごせた時間は楽しかった。
だけど、ボクはキミを守るために生まれた存在なんだ」



「ボクがキミの足を引っ張るわけにはいかない」

そう言うとき彼は腕を頭の後ろに組んだ。
もう話すことはないということだろう。

ポケットに手を伸ばし、再度渡された拳銃を手取る。
確かに荒っぽい出来だが、それは私の精神世界だから、ということだろう。
思えば確かに私はそういったものを詳しくみたことはなかった。

握ったほうと反対の手を拳銃に添える。
壁を殴った手はまだヒリついているが、そんなことはどうでもよかった。
そうして、しっかりと狙った。

選択：
発砲する対象を選択してください。

